白鳥の国

秋田雨雀著
安　泰　絵

白鳥の国

秋田雨雀著　安　泰　絵

913.6 秋田雨雀
白鳥の国
新日本出版社 1973
194p 21.5cm (新日本創作少年少女文学)

秋田雨雀
あきたうじゃく

1883年，青森県に生まれる。本名徳三。早稲田大学英文科卒業。
児童文学，演劇運動，エスペラント運動など幅広い活動を行う。1950年から5年間児童文学者協会会長をつとめる。
1962年没。79才。

安泰
やすたい

1903年，茨城県に生まれる。日本美術学校日本画科卒業。童画ぐるーぷ「車」同人。児童出版美術家連盟，日本美術会，美術家平和会議に所属。
1952年，第一回「小学館児童文化賞」受賞。
『クマの絵本』『ネコの絵本』(童心社)『カエルとおてんとうさま』(新日本出版社)など，数多くの装丁・さし絵を手がけている。1979年没

新日本創作少年少女文学　白鳥の国

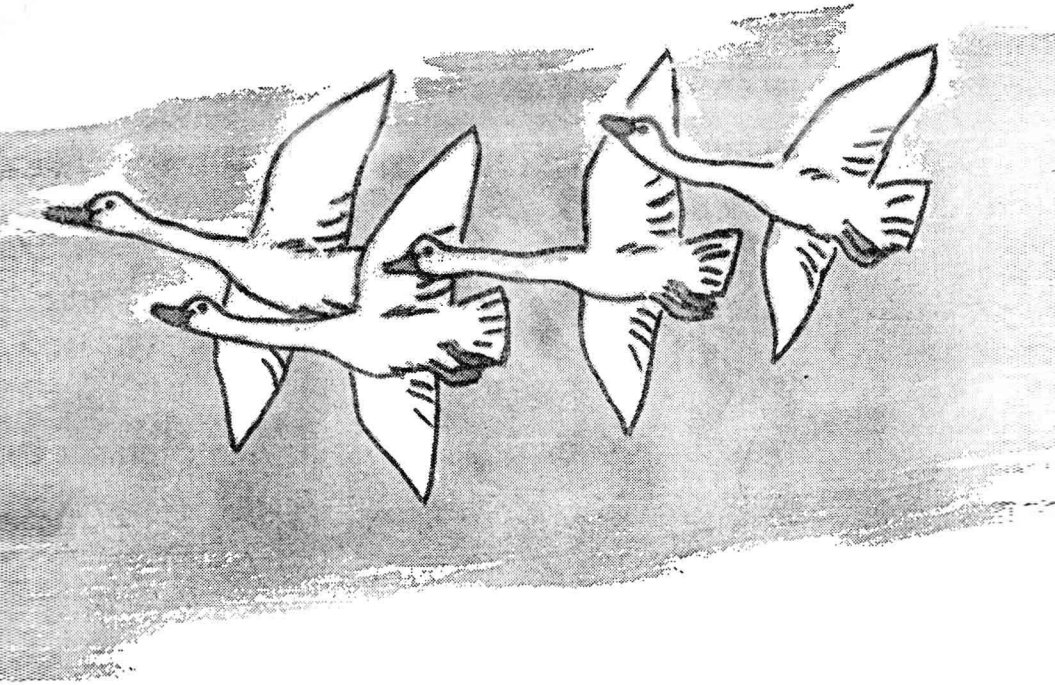
1973年4月28日　第1刷発行
1980年2月10日　第5刷
定価　1200円

著者　秋田雨雀
画家　安泰
発行者　松宮龍起

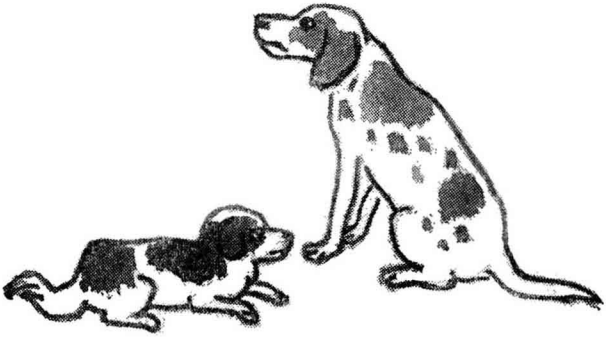
郵便番号 151　東京都渋谷区千駄ケ谷3—11—8
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　03(478)3311　振替　東京 3-13681
印刷　光陽印刷　製本　小高製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

＊もくじ



■第一部
旅人とちょうちん……7
三人の百姓……19
つるとかに……33
老僧と三人の弟子……44
白鳥の国……54
牧神と羊の群れ……62
■第二部
太陽と花園……79
先生のお墓……89
監督判事……99
酒とやせ馬……109

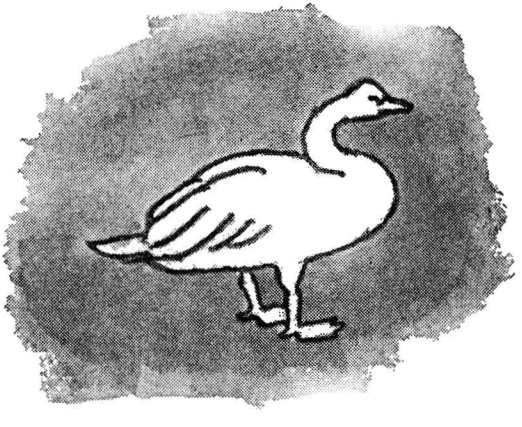


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

野の郡長さん……119
犬と手ぶくろ……126
指人形の世界……134
一郎とにぎりめし……141

■第三部

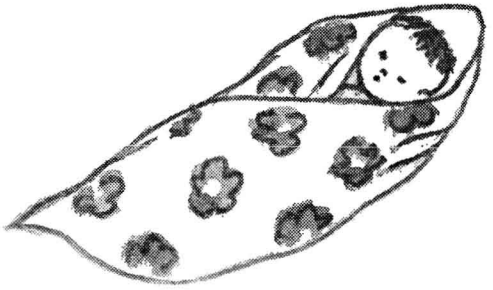
津軽の四季……153
ネプタ祭り……170
かたくりの花とやき米……176
十和田湖の思い出……181
めくらの詩人の物語……184
黒海でたべた赤いかき……188
〔解説〕　菅　忠道……192



装丁・さし絵

安泰（やすたい）

第一部



第一部には、寓話（たとえ話）ふうの作品をあつめてあります。寓話といえば、むかしからイソップ物語が有名ですが、あたらしい寓話を代表するのはトルストイの童話です。十九世紀のロシアにでた世界的な大文学者トルストイは、民衆や子どもたちのために、民話ふう、寓話ふうの童話を書きました。秋田雨雀先生は、このトルストイに学んで、民話ふう、寓話ふうの童話を書くのに力をいれました。その代表作を、ここに選びました。

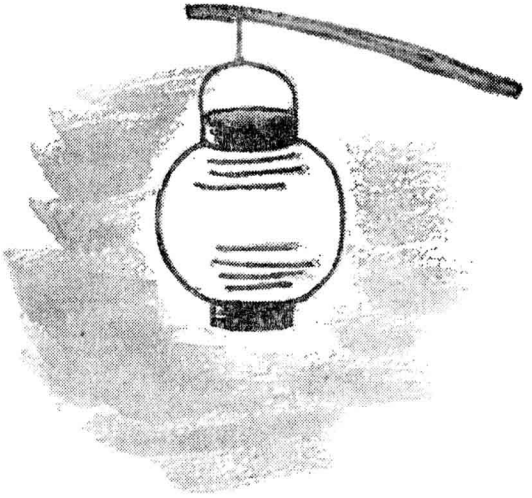
雨雀先生は、郷里（青森県）の伝説をもとにして、「旅人とちょうちん」や「三人の百姓」、また「老僧と三人の弟子」のような民話ふうの作品を書きましたが、先生はこのなかで、人間の正しい生きかたを考えさせてくれます。そして、自分のことしか考えない人間のおろかさ、おかしさ、悲しさを感じさせてくれます。

「つるとかに」も、「白鳥の国」も、童話としてはめずらしく悲劇でおわっています。どうしてこんな結末になるのか、それがこのたとえ話を通してくっきりとえがきだされるわけです。ここには、不正や無知にたいする雨雀先生のきびしい批判がしめされています。

「牧神と羊の群れ」は童話劇ですが、雨雀先生が演劇界でたくさんの仕事をしてきたことと、戦争に反対し平和運動につくしてきたことを記念して、この本にいれることにしました。

以上の作品は、一九一八～二〇年に書かれたものです。

旅人とちょうちん



むかし津軽という国と南部という国とが領分のことで長い間戦争をしていました。戦争が終えたかと思うとまたすぐ戦争が始まりました。春に戦争が終えると秋にはきっと新しい戦争があるというほどでした。

しかしいつまでたっても領分の決まったということがありません。

そこで国ざかいの百姓どもは相談して津軽のむすめを南部によめにやり、南部のむすこを津軽にむこにもらったら、おたがいになかがよくなって、けんかしないようになるだろうといいだしました。

この考えにはみんな同意しました。そこで国ざかいの村々では急にしゅうぎがふえました。

津軽のむすめはきれいにおけしょうして、南部津軽のとうげをこえておよめにいきました。

南部のむすこは津軽南部のとうげをこえておむこさんにいきました。よめさんもむこさんもはじめのうちはなんとなく心配でしたけれども、なれてみると人情にかわりのないことを知って、みんなよく働きました。

南部のむすこは南部のむこさんになるより、津軽のむこさんになるのを喜びました。

そして津軽のむすめは津軽のよめさんになるより、南部のよめさんになるのを喜びました。

「なんてたまげた話だ。」

と、村の年よりたちは目をまるくしておどろきました。

それもそのはずです。南部の年よりたちの頭には津軽の男はくまかおおかみのように思われていたし、津軽のとしよりたちには南部の男はあばら骨の一本たりない人間だと思われていたのですから。

津軽と南部が戦争をしなくなったので百姓たちは大喜びでした。

こういうことのあってからまもないころのことでした。津軽の方の山のふもとに一軒の茶屋がありました。夫婦にふたりのむすめがありましたが、上のむすめはおきよといって村でも評判のむすめでありました。夫婦のものはこのむすめをこのうえもなくかわいがって、大きくなったらいいむこさんをもらって家をつがせようと、ただそればかり楽しみにしていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

むすめはえんりょなく大きくなりました。村の物持ちの家でむすこのおよめにほしいと再三人をよこしてたのんでみたけれど、おやじはむすめはむこ取りだからといってことわりました。

「それにまだほんとに子どもですから。」

と、母親はえんりょらしくいいました。

むすめはからだの少し小づくりな女でしたけれども、目鼻だちのはっきりした、このへんではとてもみられないほどの女でした。それにこのむすめはたいへんいい声で、盆おどりのとき、このむすめが歌いだすと、だれも歌いつづけるものがなくなるほどでした。村の若衆たちはこのむすめを見るために毎日夕方になると茶屋の店に集まってきました。しかしむすめはべつに若衆たちとふざけるようなこともなく、いつもにこにこして柱によりかかって往来をながめていました。往来のすぐ前は大きな山になっていて山から流れてくる水をといにして、水つぼにはきょうやおみなえしなどが四、五本投げこまれていたりしました。

ところがある秋のすえ、盆のおどりの終えたころ、このむすめはとつぜんすがたをかくしてしまいました。夫婦は気ちがいのようになって、むすめのゆきそうな家をさがして歩きましたけれども、どこにもいませんでした。亭主は、ちょうど子犬をかくされた親犬のように、どんなものかげでものぞいて歩きました。山の上へ登っていっては、むすめの名をよびつづけました。やっぱりむすめはどこにもいませんでした。

しかし二十日ばかりたって南部のかなやまからきた若い工夫の言葉で、むすめのありかがはじめてわかりました。むすめは山をこえた南部の村で、若い南部の男といっしょになって家を持っているということでありました。

むすめのおやじは腰をぬかさぬばかりにおどろきました。そして母親にいいました。

「あんな子どもをだましてつれていくなんて、よほどふといやつだ。むかしから南部の男はあばら骨が一枚たりないなんていったのはほんとうのことだ。さっそく庄屋どのにおねがいして取りかえしてみせるから。」

「でもむすめさえしあわせならわたしはしかたがないと思うよ。なにしろこうしたばかげきった時世だからね。おじいさん。」

と、母親は亭主をなだめるようにいいました。亭主はいったんおこってみたものの、心の中ではただむすめがしあわせでいてくれればいいというのぞみのほかべつに深い考えがなかったのでした。

「それもそうだ。いくら南部のやつらでも、むすめをくわせないでおくはずはなかろうから。」

と、亭主はいくらか安心したようにいいました。

するとまもなくむすめのところから手紙がきました。その手紙によると、むすめはたいへんに親切にされていることや、若い亭主とふたりで大きな畑を耕していることや、その畑の中に大きななしの木があって、たくさんなしがなっているから送ってあげるということなども書いてありました。

tai

おやじがその手紙を母親に読んできかせると、母親はだまってなみだを流していました。

「わたる世間に鬼はない、とよくいったものだ。」

と、亭主はいいました。

その夜亭主は母親のねむってしまったあとで、そっと起きてむすめにあてた手紙を書きました。そしてその手紙を知りあいの工夫に持たせてやろうと思いました。その手紙には、おまえが親に相談もしないで家を出たのはたいへん悪いことであるが、わたしたちは今それをかれこれいいたくはない。ただいったんよめになったからにはけっして家へ帰ってくると思うな、世間には鬼はない。自分の心一つでどんなにもなるものだ……。わたしはとうぶんおまえに会いたくないが、もしおまえがわたしに会いたいと思うならば春になってくるがいい。会ってもいい。ということなどが書いてありました。

往来にも山にも雪がふりつもりました。冬になってからは毎日毎日雪がふりつづけたので、とうげのあたりは一丈もつもりました。晴れるとかた雪になってかたまった雪の上にまたふりつもるので、山も川も谷も道も一面雪で、どこがどこやらさっぱりわからなくなってしまいました。

正月にはいってめずらしく雪が晴れました。

町買いの人たちが茶屋の前をいったりきたりしました。店にはおのぶという妹がすわっていて、もめんの布や、だがしなどを売っていました。店の前を通る人たちは、大きなむすめがいないのでみな

ものたりないような顔をしてゆきました。

夫婦は南部にいるむすめがいつ遊びにくるかとそればかり楽しみにしていました。母親はとうげの方からおりてくる客があれば、だれでもとらえて、むすめをみなかったかとききました。十日からまた雪がふりだしてきました。毎日毎日青空を見ることができないほどふりつづけました。しかし十六日の朝に雪がからっと晴れて新しい天地が生まれてきました。まっ白な雪の上に日光が明るく照りかえしているので、まぶしくてまともに外を見られないくらいでした。

夫婦はきょうこそむすめが遊びにくるだろうと朝から楽しみにしていました。母親はむすめの好きそうなごちそうをこしらえていました。おやじは雪はらいを持ってかいどうをはきながら、店から遠いとうげの方までいってみました。とうげをおりてくる馬子(まご)たちはおやじにおじぎをしながら、ふしぎな顔をしておやじを見あげました。おやじは雪はらいを持って自分の家へ帰ってきました。

「まだおきよは見えませんか?」

と、母親は聞きました。

「見えない。朝どんなに早く立ってもちうはん時でなけりゃつくまいて。」

「そりゃそうですね。どうしても昼めしすぎになりますね。そんなところにぼんやり立っていないでたらでも焼いたらどうです?」

と、母親はおやじをしかるようにいいました。

午後になってもむすめは来ませんでした。三時ごろからまた雪がふりだしてきたのでふたりはもうがっかりして、おたがいにものをいうのもいやになったというふうにろばたにすわって、燃えている火ばかりながめていました。店にいるおのぶがときどき品物のねだんなどを聞いても、おやじは返事もしないほどでした。

夕方から雪がますますはげしくふりだしてきました。夫婦とおのぶとは元気のない顔をして夕飯(ゆうはん)をたべて、おきよにたべさせるつもりで焼いたたらを三人でたべてしまいました。

おやじはあんどんをつけさせて、早くねどこへはいってしまいました。母親はむすめといっしょに店をしめたり、あと片(かた)づけをしたりして、これも無言(むごん)でねてしまいました。外は大ふぶきで、こな雪が家の中へもふきこんでくるほどでした。戸や雨戸が風にあおられてはげしい音をたて、今にもふきとばされそうです。むすめのおのぶは昼のつかれでまもなく小さないびきをたててねむってしまいましたが、夫婦は寒さとらくたんで長い間ねつかれませんでした。

夫婦がうとうとねつこうとするころ、表の戸をたたく音がしました。

「もしやむすめではないか?」

という考えが同時に夫婦の胸(むね)の中を流れてゆきましたが、すぐそれをうちけす考えが心の中から生まれてきました。

「もしもし、はなはだすみませんが、ちょっと起きてくださいませんか……」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com